

日本産ヒゲナガモモフトカミキリ属の再検討

藤 田 宏

A Revision of the Genus *Acanthocinus* GUÉRIN in Japan (Cerambycidae, Col.)

By Hiroshi FUJITA

(Received May 20, 1976; Accepted July 15, 1976)

従来、日本における分布が知られる *Acanthocinus* 属のカミキリは、*A. griseus* (FABRICIUS) ヒゲナガモモフトカミキリ (スジマダラモモフトカミキリ) ただ1種で、戦前に北海道^{2,4,5,7,9,11,13,14} および本州¹³ から報告されていた *A. carinulatus* GEBLER カラフトモモフトカミキリは、その後久しく記録されなかったためか、分布に疑問がもたれ、最近の図鑑^{16,15} や総説²⁰ 類では疑問種としてとり扱われるか、あるいは削除されていた。

筆者は、北海道十勝支庁大雪山麓周辺で得られた多数の *Acanthocinus* を調べた結果、あきらかに2種が混生しており、*A. griseus* 以外のもう1種は、*A. carinulatus* であることを確認したので、ここにその詳細を報告しておく。

カラフトモモフトに関する戦前の文献を調べていくうちに、日本産の *Acanthocinus* についていくつかの新知見を得、また、ヒゲナガモモフトの本州以南のものは原種と区別しうるため、別な1型 (var. *orientalis*) とした大林 (1939)¹² の見解を妥当と考えた。カラフトモモフトの日本における再確認記録をしるすと共に、併せてこれらの知見についてもまとめてみたい。

本文にあたり、草間慶一博士、黒沢良彦博士、小比賀正敬博士、高桑正敏、深町宗通の各氏には種々のご教示をいただき、特に草間博士には文献の便宜をはじめ、多くのご助言を賜った。また、北大の青木重幸氏は北海道大学農学部昆虫学教室保管の標本をお借りする際に便宜を計って下さり、平山洋人、蓮尾篤氏はこの研究のために色々と標本を貸して下さった。さらに、標本写真撮影には中臣謙太郎、高桑正敏の両氏を煩わせた。これらの方々には深く感謝の意を表したい。

Present address:

2-29-6, Taitô, Taitô-ku, Tôkyô city (〒110)

○ヒゲナガモモフト以外の日本産

Acanthocinus を扱った文献とその研究史

戦前の文献にはヒゲナガモモフト以外の *Acanthocinus* の記録が少なくないが、これらは現在 *Acanthocinus* でないものや、誤って書かれているものなどが多く、整理が必要である。

カラフトモモフトの記録を調べてみると玉貫(1933)⁵ を境に、それ以前の記録では松下 (1932)^{7)*} を除き、学名が *A. oppositus* CHEVR. とされている。玉貫において *oppositus*=*carinulatus* とされているのだが、本文には Junk のカタログに従って訂正したということが書かれているだけで、*oppositus* が *carinulatus* の synonym とされた詳しい理由についてまでは触れられていなかった。そこで、*A. oppositus* なるカミキリがいつ、どこで記載されたものか調べるため、世界のカタログ類を調べてみたが、不思議なことにそのようなカミキリは全く見あたらなかった。戦前の学者は、*A. oppositus* を KRAATZ (1879)¹¹ より引用していると思われるので、調べてみると、確かに「japanischen *oppositus* CHEVR.」なるものはあったが、*Acanthocinus* 属のカミキリではなかった。その前後関係より考えると、次のようなことが推測される。(以下、草間博士のご教示による)

つまり、同文中では *Acanthocinus* のいくつかの種について述べた後、genus が変っているにもかかわらず、その後続く種名を、genus を書きおとして書いたため、すべてが *Acanthocinus* に含まれる種と誤解されたものと思われる。すなわち、この文中の「japanischen *oppositus* CHEVR.」というカミキリは本来、*Anthoboscus* (トラカミキリの1属) に含まれるもので、*An-*

*) 種名の後に (新称, 未録種) とある。

thoboscus oppositus CHEVR. は、現在では *Chlorophorus signaticollis* CASTELNAU et GORY (ウスグロトラカミキリ) の synonym とされている。

——ということで、一体どのような経緯で *oppositus* (ウスグロトラ) がカラフトモモトにあたると考えられたのかはわからないが、“*Acanthocinus oppositus* CHEVR.” なるカミキリは今までに記載されたことはなく、実在しない種名である。

カラフトモモトを扱った文献のうち、文献番号2, 3, 4, 5, 6, 11では *oppositus*, 7, 8, 9, 10, 13では *carinulatus* とされているが*, *oppositus* として書かれたすべてを *carinulatus* と考えるならば、日本におけるカラフトモモトの初記録は三橋 (1905)²⁾ となり、“カラフトモモト” の和名は前述のように松下 (1932) より使われている。また、松下 (1933)¹⁰⁾ は樺太産の *A. carinulatus* を var. *sachalinensis* として区別し、記載している。

今までに使用された日本産の *Acanthocinus* の和名・学名を整理すると、下記ようになる。

(和名)

シロオビモモトカミキリ^{2,3,4)}など → カラフトモモト
オオシロオビカミキリ⁵⁾ → //

*) TAMANUKI (1933)⁹⁾ の *oppositus*, 三輪・水戸野 (1941)¹³⁾ の *carinulatus* はそれぞれ *oppositus*, *carinulatus* の誤植か誤記。

表1 カラフトモモトとヒゲナガモモトの区別点 (* Plate 3 参照)

	カラフトモモト	ヒゲナガモモト
体 型	全体としてずんぐりしており、頑強な感じをうける	全体として細く、華奢な感じをうける
上 翅	上翅は比較的短い (頭部+前胸：上翅の比=1:2.3) 上翅の幅：長さの比=1:2.1 上翅端はせばみらず、かくばる 上翅の点刻は比較的疎 上翅の微毛 (白色毛, 黄褐色毛) は細く長い	上翅は比較的長い (頭部+前胸：上翅の比=1:2.6) 上翅の幅：長さの比=1:2.5 上翅端はせばまり、丸みをおびる。 上翅の点刻はかなり密 上翅の微毛 (白色毛, 黄褐色毛) は米粒状の短い毛
肢	肢は比較的太く短い 各付節の基部の白色微毛は多く、めだつ	肢は比較的細く長い 各付節基部の白色微毛は少なく、めだたない
触 角	触角は比較的太く短い	触角は比較的細く長い
合の交尾器	Plate 3, Fig. 1b 参照	Plate 3, Fig. 2b 参照
♀の産卵管	産卵管は比較的短い (上翅の約0.4倍)	産卵管は比較的長い (上翅の約0.6倍) * ただし, ssp. <i>orientalis</i> ではやや短い

ヒノモモトカミキリ²⁾
(学名)

→学名の欄参照

*A. stillatus*²⁾など→現在の *Leiopus stillatus* のこと
(ゴマダラモモト)

A. oppositus }
A. alpinnus } → *A. carinulatus*
A. sibiricus }

*A. moirwellus*²⁾ →未記載種。おそらく、現在のナカバ (ヒノモモト) ヤシモモトかヤマナラシモモトをさしていたものと思われる

○*A. carinulatus* と *A. griseus* の区別点

カラフトモモトとヒゲナガモモトの両種は、互いによく似ており、同定は容易ではないが、見慣れれば体型 (特に上翅の形) その他からすぐ区別することができる。詳しい差異は表1にまとめたが、両種を比較した場合の相対的な差ではわかりにくいかもしれない。その場合、最も確実な同定法は50倍程度の双眼顕微鏡で上翅の微毛を調べることで、カラフトは細長い毛、ヒゲナガは米粒状の毛 (Plate 3, Fig. 1d, 2d 参照) と、一見して区別することができる。

注1) *Acanthocinus* 属のカミキリの上翅斑紋は変化が多く、種の同定にはあまり役立たないが、全体的にカラフトモモトの微毛は白色毛がほとんどで、ヒゲナガモモトは黄褐色毛がかなり混ってくる。これは特に腹節に顕著に現われ、カラフトでは白色毛、ヒゲナガでは黄褐色毛ばかりとなる。

注2) 以上の特徴を用いて判断すると、小島・林 (1969)¹⁸⁾ で、p. 149, pl. 47, f. 1a に図示されている *Acanthocinus* (北海道糠平の♀) は、ヒゲナガモモトでなく、カラフトモモトと思われる。

○未整理の問題点

カラフトモモトの同定は文献その他より行なったが、1つだけ気になる点があった。それは GEBLER がわざわざ *carinulatus* と命名しているのに、上翅には *carina* らしい *carina* はなく、縦の弱いすじがあるだけで、これでは *carina* とは言いがたい。140年以上も前の記載なので、あるいは現在の *carina* とは多少ニュアンスが異なり、この縦すじを *carina* と称していたのかもしれないが、とにかくタイプ標本を見ていないので、その点が気になった。草間

(1973)²⁰⁾によれば、ヒゲナガモモフトおよびカラフトモモフトの holotype 標本は、それぞれ英博(疑問印つき)とベルリン博に所蔵されているとのことであるが、その後同博士に問い合わせたところ、いずれも現在はそれらの博物館に無く、どこにあるのかは不明ということで、タイプ標本を見ることは困難なようである。

今回、本文でカラフトモモフトとした種は、手元の標本を見るかぎり、北海道・樺太・朝鮮・満州・シベリアにヒゲナガモモフトと共に分布しているようだが、万一真の *carinulatus* がこれときわめてよく似た別種の場合は、松下(1933)¹⁰⁾が樺太産の標本を基に *carinulatus* の1型として記載した*) var. *sachalinensis* を独立種として昇格させねばならない可能性もある。

カラフトモモフトは今のところ、大雪山周辺・日高山脈・空知支庁雨竜湖・知床半島(岩尾別)などで得られており、特に大雪山周辺では7~8月に各種針葉樹の伐採木上で、ヒゲナガモモフトと共に非常に多くの個体が見られた。今後、カラフトモモフトが道内でどのように分布しているか、あるいは本州の東北地方まで進入していないか、など読者諸氏に注意していただきたい。また、見慣れれば材上を這いまわっている個体でも、ヒゲナガモモフトかカラフトモモフトかの区別をつけることができると思われるので、今後道内で本種を採集する機会のある方は、活動時間・host のようなことですみわけを行っていないか、観察してみていただきたいと思う。

○本州以南のヒゲナガモモフトについて

大林(1939)¹²⁾では日本産のヒゲナガモモフトを、ヨーロッパ産のものと比較し、1)体が大きいこと、2)♂では触角が体長の約3倍あること、3)♀では産卵管を除いた体長が原亜種の倍近くあること、などの点より、ヒゲナガモモフトの1型として var. *orientalis* という新種を与え、区別している。

本州のヒゲナガモモフトは大陸のものとは比べ、色々な点で異なっているので、筆者は大林氏の見解を妥当と考えるが、1型というより、むしろ別亜種とした方が適切と思われるので、次にこれを別亜種に昇格させる。本州以南のヒゲナガモモフトは大陸や北海道産の原亜種に比べ、1)体が一般に大型、2)上翅において、基部が幅広く翅端へ向うにつれ細まる、3)黄褐色の微毛が多いため、

原亜種に比べ褐色がかっている、4)♂の交尾器が異なる、5)♀の産卵管はカラフトモモフトより長い、原亜種に比べると明らかに短いなどの点で区別することができる。(Plate 3 参照)

Acanthocinus griseus orientalis

OHBAYASHI, status nov.

Acanthocinus griseus var. *orientalis*: OHBAYASHI, 1939, Trans. Kansai Ent. Soc. 8, p. 116

K. OHBAYASHI described a new variety, var. *orientalis*, for specimens of *A. griseus*(FABRICIUS) in Honshû and Kyûshû in 1939. but the author thinks it is better to elevate the variety to a rank of the subspecies. Because the specimens in Honshû and Kyûshû are easily distinguished from nominative ones by the following characters; body is larger, base of elytra is broader, pubescences are more yellowish brown, and different figures of male genitalia and female opipositer(as shown in photograph).

ssp. *orientalis* は本州以南に産し、日本でも北海道までは大陸と同じ原亜種が分布する。大林氏の記載は、鳥取県・埼玉県・福岡県で採集された標本に基づいたもので、その時点ではおそらく北海道産のものを見ておられなかったであろう。

Examined materials

Acanthocinus carinulatus GEBLER

17♂♂13♀♀, 幌加, 15. VII. 1973 17♂♂18♀♀, 幌加, 24. VII~2. VIII. 1975; 2♂♂, 十勝支庁敦沢, 5. VIII. 1975; ; 4♂♂3♀♀, 十勝支庁ニベソツ山, 3. VIII. 1975; 1♂, 空知支庁北母子里, 22. VII. 1975; 1♂, 日高山脈, 22. VII. 1958, …… (Hokkaido; Japan)

2♂♂, 29. VII. 1914, 1♂, 10. VII. 1933, 1♂, 28. VII. 1923……………(Saghalin) 1♂1♀, 16. VI. 1941, 1♀, 2. VII. 1941……………(Manchuria) 1♂……………(Shiberia) 1♂, 27. VII. 1940……………(Korea)

Acanthocinus griseus griseus (FABRICIUS)

10♂♂14♀♀, 幌加, 15. VII. 1973; 1♀, ラウス岳, 18. VII. 1973; 1♂, 峠下, 9. VIII. 1975; 5♂♂7♀♀, 幌加, 24. VII~2. VIII. 1975; 1♂, 敦沢, 5. VIII. 1975; 2♀♀, 北母子里, 22. VII. 1975……………(Hokkaido; Japan) 1♂, 19. VIII. 1925……………(Iss. Kuril) 1♂, VII. 1934……………(Saghalin)

Acanthocinus griseus orientalis OHBAYASHI

1♂, 神奈川県横浜市, 20. VI. 1973; 1♂, 横浜市, 19. VII. 1971; 20♂♂20♀♀, 東京都高尾山, 1. VIII. 1975; 多数, 高尾山, 28. VII. 1969……………(Honshû; Japan)

*) 松下(1933)の記載によれば、var. *sachalinensis* の type 標本は北大所蔵となっている。筆者は北大にある国外の *Acanthocinus* をすべて借りてきたが、樺太産の *carinulatus* 5♂♂の内、1♂に「*Acanthocinus carinulatus* var. *sachalinensis*」と松下博士の Det. label がついている標本があっただけで、記載の日付にあたる標本はなかった。

Summary

In this report, the author describes Japanese Genus *Acanthocinus* GUÉRIN (Acanthocini, Cerambycidae). In the results, the author confirms again the records of *A. carinulatus* GEBLER from Hokkaidô which has been questionable since the Post-World War II period in Japanese fauna, and newly arranges Japanese Genus *Acanthocinus* GUÉRIN as follows:

Acanthocinus carinulatus GEBLER

Distribution: Hokkaidô

A. griseus griseus (FABRICIUS)

Distribution: Hokkaidô

A. griseus orientalis OHBAYASHI

Distribution: Honshû, Shikoku, Kyûshû, Is. Tsushima, Is. Tanegashima, Is. Yakushima

参 考 文 献

- | | |
|---|---|
| 1) KRAATZ (1879): Deutsche Ent. Zerst. Schr., 23(1), p.82 | 12) K. OHBAYASHI (1939): Trans. Kansai Ent. Soc., 8, p.116 |
| 2) 三橋信次 (1905): 札幌博物学会会報, 1(2), p.206 | 13) 三輪勇四郎・水戸野武夫 (1941): 日本産鞘翅目分類, 天牛科, p.192 |
| 3) S. MATSUMURA (1911): Journ. Agr. Coll. Sapporo, 4(1), p.140 | 14) GRESSITT (1951): Longicornia, 2, p.520 |
| 4) 松下真幸 (1930): 動物学雑誌, 42(495), p.28 | 15) G.O. KRIVOLUTZKAJA (1961): Ent. Obozrenie, 40, p.313 |
| 5) 松村松年 (1931): 通俗日本昆虫図鑑, Ⅲ, p.86, pl. 19, f. 11 | 16) 大林一夫 (1963): 原色日本昆虫図鑑, Ⅱ, Cerambycidae |
| 6) 斎藤孝蔵 (1932): 水原農高創立 25 周年記念論文集, p.7 | 17) 桑山覚 (1967): 南千島昆虫誌, p.151 |
| 7) 松下真幸 (1932): 北海道林業会報, 30(352), p.183 | 18) 小島圭三・林匡夫 (1969): 原色日本昆虫図鑑, I カミキリ編, p.149, pl. 47, f. 1~1a |
| 8) 玉貫光一 (1933): 朝鮮博物学会雑誌, 16, p.15 | 19) G.O. KRIVOLUTZKAJA (1973): Entomofauna of the Kuril Islands, p.99~111 |
| 9) K. TAMANUKI (1933): Ins. Mats., 8(2), p.82 | 20) 草間慶一 (1973): 日本産カミキリの生態と分布一覽表, 新しい昆虫採集案内Ⅲ, p.155 |
| 10) M. MATSUSHITA (1933): J. Fal. Agr. Hokkaidô, Imp. Univ., 34(2), p.391 | |
| 11) 河野広道 (1936): Biogeographica, 1, p.129 | |

Explanation of Plate 3 (p. 21)

- | | |
|--|-----------------------|
| Fig. 1 <i>Acanthocinus carinulatus</i> GEBLER, | ♂ (Horoka, Hokkaidô) |
| Fig. 1a ditto , | ♀ (ditto) |
| Fig. 1b Male genitalia of <i>A. carinulatus</i> GEBLER, | (ditto) |
| Fig. 1c Elytron of <i>A. carinulatus</i> GEBLER, | ♂ (ditto) |
| Fig. 2 <i>A. griseus griseus</i> (FABRICIUS), | ♂ (ditto) |
| Fig. 2a ditto , | ♀ (ditto) |
| Fig. 2b Male genitalia of <i>A. griseus griseus</i> (FABRICIUS), | (ditto) |
| Fig. 2c Elytron of <i>A. griseus griseus</i> (FABRICIUS), | ♂ (ditto) |
| Fig. 3 <i>A. griseus orientalis</i> OHBAYASHI, | ♂ (Yokohama, Honshu) |
| Fig. 3a ditto , | ♀ (Mt. Takao, Honshu) |
| Fig. 3b Male genitalia of <i>A. griseus orientalis</i> OHBAYASHI, | (Yokohama, Honshu) |
| Fig. 4 <i>A. carinulatus</i> GEBLER, ♂ [Siberia] (Siberia in Japanese) | |
| Fig. 5 ditto , ♂ [Manchuria] (Manchû in Japanese) | |
| Fig. 6 ditto , ♂ [Korea] (Chôsen in Japanese) | |
| Fig. 7 ditto var. <i>sachalinensis</i> MATSUSHITA, ♂ [Saghalin] (Karafuto in Japanese) | |
| Fig. 8 <i>A. griseus</i> (FABRICIUS), ♀ [ditto] | (ditto) |
| Fig. 9 ditto , ♂ [Islands Kuril] (Islands Chishima in Japanese) | |

